

研究ノート

近代化日本—欧米との関わりで見る日本の近代化—(2)

— 世界史的視点から —

松原正道*

西洋文明の伝道者フランシスコ・ザビエル（Ⅱ）

序

前稿では、『近代化日本—欧米との関わりで見る日本の近代化—世界史的視点から』の主題に基づき、日本にキリスト教の布教と言う形を以て、西欧文明、特に、その近代化を象徴すると言える、「人間（中心）主義」、「合理精神（主義）」をもたらしたと考えられるフランシスコ・ザビエル Francisco de Yasu y Xavier（1506-52）の人となりについて、アジアでの布教活動を通して考察した。

近代を現象として現わした「大航海時代」、「ルネサンス」、「宗教改革」と言う風潮の中で、「国民国家」、「中央集権」、「常備軍」と言う国家体制が形づくられて行くのである。

その「大航海時代」の波に乗って、アジアでの布教に携わったザビエルだったが、そこでの布教活動において、もう一つ満足がいかなかったとも言えるザビエルにとって、マラッカでのアンジローとの出会いは、彼に、これ迄にない感動と期待を与えるものだったわけである。

マラッカでのアンジローとの邂逅によって始めて日本人を知ったザビエルにとって、日本人とはどんな人間、どんな民族、そして、日本と言う国がどう言う風に写ったのだろう。

その事、それは全てアンジローとの関わりで以て得られる事だったのである。

それについての最初の体験とも言えるものが、自らのインド帰還に際してアンジローに同道を求めたのだが、彼は世話になったアルヴァレスと行動を共にするとして、同行しようとしなかったと言う事で以て現わされたのである。

*淑徳大学名誉教授



写真1 マラッカ海峡と大航海時代の船(復元)

写真2 サンチャゴ砦とセント・ポール
(丘の上の)教会(マラッカ)

I

〈ザビエルの持った日本(人)観〉

アンジローとのマラッカでの出会いを以て日本への布教を考えるようになったザビエルにとって、日本人あるいは日本をどう感じるようになったかは、先ずはアンジローの言動を通して形づくられて行く事になるわけだが、その出会いから間もない時に、ザビエルにそれについての大きな印象を与える出来事が起こったわけである。

アンヘロが来てから8日後、私は印度へ向かつて出発した。私は、この日本人が、私と一緒に船に乗ることを大いに希望した。けれどもアンヘロは、今まで彼の願いを叶へ、大いに厚遇してくれたポルトガル人と、今別れることはよくないと思ったのである。私は彼を、10日の後までコチンで待っている。

アルーベ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書簡抄』(上) 岩波文庫 2009 266頁

と言うように、アンジローはその邂逅を願っていたにも関わらず、インド行についてはザビエルに同行するのではなく、これまで面倒をみてくれたアルヴァレスと行を共にするのだった。

こうした彼の律儀とも言える人柄についてザビエルは記しており、これも彼の日本人観形成に大いに役立っていると言えるのである。

従って、こうしたアンジローの人柄に接してザビエルは、日本布教の思いをさらに強める事になったと言えるだろう。

そうした事を念頭に、ザビエルはその後の自らの「生きる」を方向づけるためにと、アンジローに対して問うのである。



写真3 セント・ポール（丘の上の）教会と
ザビエル像（マラッカ）



写真4 セント・ポール教会側面（マラッカ）

若し私が彼と共に日本へ往つたら、日本人は、果たして信者になる
だろうかどうか尋ねて見た。

同上書 267頁

と。

そして、その問いに対してアンジローは次のように答えたと言われている。

私が、彼らの質問に満足な答え与へると共に、私の生活ぶりに非難
する点がないといふこの二つのことに及第すれば、恐らくこんな試験
期が半年ほど続いて後、國王を始め、武士も思慮ある凡ての人達も、
キリストへの信仰を表明するやうになるであらうといふ。

同上書 267頁

と。そして、

日本人は、理性のみに導かれる國民だといふ。

同上書 267頁

とも言ったと言われているのである。

この事は、後述する如く、最初は、渡来したポルトガル商人のキリスト教徒としての日常
における立ち居振る舞いが、日本人にキリスト教に関心を示させるようになったと言う事
であるが、これに繋がるものと言えるだろう。

従って、渡来する宣教師達のその『『生きる』』に対する姿勢こそが大事なのだ」と言う事を指摘しているアンジローの答えなのである。

「人」が信仰、宗教に帰依するに当たってはそれを体現している「人間」の存在が大きいのであって、その人格が「人」に信仰の道に入る事を促させるのであり、ザビエルが、「人間」として、また、「信仰の伝道者」としてどう見られるかによるのだと言う事を言っているわけである。

そこには、教義（理）と言うものは立派なものではあるのだが、難解な側面を否定し得ないため、入信を勧めるに際して、「ただ念仏（経文・祈り）を唱えてさえいればよいのだ」と言う事がしばしば言われるわけだが、果してこれだけで真の入信に繋がるものだろうか。

それを勧める者にその教義（理）の立派さを体現している事を感じさせられるか否かによって、人は自らも入信してみようと言う気になるのであって、アンジローはその事を言っていると言えるのである。

その上、それを見極める事が出来る「高級さ」を日本人は持っていると言う事も言うのである。

そして、

住民の大部分は、読むことも書くこともできる。これは、祈りや神の事を短時間に學ぶための、すこぶる有利な點である。(中略) 彼らは盗みの悪を、非常に憎んでいる。大変心の善い國民で交わり且つ學ぶことを好む。

同上書（下） 27頁

とも、ザビエルは言っているのである。

だが、ザビエルにそう言われながらも、分別のつく年齢まで日本で過ごし、自らは人を殺めて追われる立場に立ったと言う「生きる」を送っているアンジロー、その追われる身について彼はどう語り、それをザビエルはどう受け止めたのだろうか。

それは、ザビエルに会う前に、アンジローが望んだにも関わらず洗礼を受けられなかったと言う事で、キリスト教、カトリックの立場は示されていたのだったが、ザビエルはこれを覆して、アンジローが望んだそれを認めたわけである。これをザビエルはどう考え、カトリック、イエズス会としてはどう整合性を持たせたのだろうか。

従って、こうした彼に楽観的とも取れるような理解のさせかたをするために、アンジローはどのような話をザビエルにしたのだろうかと言う点で、疑問が生じるのである。

そして、後に、ザビエルと共に帰国し布教に従事していたアンジローだったが、ザビ

エルが鹿児島を去る事によって、その別離の後の消息が詳らかでなくなってしまうのである。つまり、イエズス会の記録に残らなくなったと言うのである。

倭寇の一員になったとも言われるようにアンジローは歴史の中に埋没して行ってしまったと言う点からして、その信仰の程度がどのようなものだったのかと言う事についても、疑問を生じさせられると共にその信仰についての姿勢を知らされるのである。

ザビエルはこの程度の信仰しかアンジローに与えられなかったのだろうか。

そして、ザビエルが大きな期待を寄せたアンジローのキリスト教徒としての「生きる」はどうなったのだろうか。尤も、その後、豊臣秀吉から始まるキリスト教徒への弾圧が行われる事になったので国の外へ出たとも言えるが、大いなる謎である。

それはともかくとして、それがアンジローの人柄、信仰に対する関心の強さを買ってのものであるとは言えるのだが、アンジローに会う迄は日本布教について、その『書簡抄』を通しては感じさせられない事から、二人の出会いがザビエルをして、心境を変化させる上で多大なものがあったと言う事は言えるのである。

その点について、ザビエルは、

私の心の中の動きを見ると、次の二年の間に、私自身か、またはイエズス会の他の司祭が日本に往くことになるだろう、と考え始めている。

同上書 267頁

とその心境を吐露する迄になるのだった。

そして、そのための準備として日本の事情を知ろうとして、その放縦な生活を非難していた商人達の中でも、信頼に足る商人に情報の提供を依頼しているのである。特に、アンジローを連れて来たアルヴァレスに信を置くのである。

私が親しくなったポルトガルのある商人は、日本に於て、アンヘロの地方に住んでいた人で、よく日本を識っているから、この人に依頼して、その経験と、信用できる人々の言葉とを基礎として、日本とその住民とに関する報告書を、作成することを頼んだ。

同上書 267頁

と言う一文から、非難をしながらも信頼に足る者もいたのだと言う彼の商人に対する見方が分かるのである。

このように日本へ渡る準備のために情報を集める事の手配を「親しくなった」、「大親友」

のアルヴァレスに依頼するのである。

それに対してアルヴァレスは『日本記 (事情)』を作成する事で以て応えるのであって、これを読む事によりザビエルの日本渡航の「心」は更に固まって行くのである。

このようにザビエルには日本に渡航経験のある「親しくなったポルトガルの商人」がいたと言う事が知れるのである。

そうした商人の日常の立ち居振る舞いからキリスト教に関心を持ち、その真似事をするようになった日本人がいる、と言う事については彼らから聞いていただろうと思われるのだが、それにも関わらずアンジローの出現まで、日本布教を考えなかったのは何故なのかと言う疑問が生じるのである。

尤も、それは府内 (大分) での出来事であり、アルヴァレス達のいた薩摩ではそう言う事はなかったのかも知れぬ。

この『日本記 (事情)』にふれた事もあってか、ザビエルは、日本には一人の強力な「国王」が実権を握り、そこには大学もあると言う認識を持つようになり、そのために、この国王の布教許可を得る事、そして、大学での論争を通してキリスト教の権威を高める事を以て布教活動をしようとするのである。それと共に、アンジローに対しては、

日本への航海では、無数の航海者が失はれるのだから、あそこへ行く布教者達のために、我等の主たる神に祈って頂きたい。その間にアンヘロは、ポルトガル語がもっと上達するであろう。印度も見物するだろう。また、ポルトガル人と交際している間に、私達の生活様式を識ることになるだろう。私達はこの待機の間、アンヘロに宗教教育を施し、日本の言葉で、信仰箇条や、わが主イエス・キリストの御降臨に関する説明や、交教要理の全部を訳する積もりである。

同上書 268頁

と言っているように、日本渡航のためにアンジローにもっと勉強をさせようとインドへ行かせるのである。

この一文からはキリスト教こそが絶対で、そのためにそれを自らがアンジローに授けるのだと言う、期待に基づく強い意気込みを述べているのであるが、それと共にその信仰に対する、絶対性を感じさせられるのである。

そして、アンジローを「現地人の布教要員を対象とした神学校」である、ゴアの聖パブロ学院に送りこむのだった。

こうしたザビエルの考え、行動に対してアンジローは、下記の参考文献に記されている

「アンジロー書簡」において、

「そのときパードレは私に、当ゴア市に向かおうとしていた上述のジョルジェ・アルヴァレスとともに、当聖パウロ学院に来るよう命じました」とあり、アンジローはアルヴァレスの船でインドへ向かうことになった。

岸野久『ザビエルの同伴者 アンジロー 戦国時代の国際人』吉川弘文館 2001 87頁

と述べていると言うのである。

そして、アルヴァレスと行を共にし、1548年3月、召し使いのジョアネとアルヴァレスの奴隷だったと言うアントニオの2人の日本人従者を伴なってゴアへ到着するのである。そして、同上書に従えば、

パードレは別の経路をとり、コモリン岬のキリスト教徒を訪問し、そこから当コレジオへ戻ることにしました。しかし、私が1548年3月初めに当コレジオへ入るとそれほど遅れることもなく、4～5日後にパードレ・マエストロ・フランシスコが到着しました。と言うのは、私は彼に初めてお会いした時、非常に感化され、決して彼から離れずに仕えたいと思ったからです。

同上書 30頁

と、当時のアンジローは、その心境を上記のように吐露しているのである。

こうした記述からザビエルのアンジローを通しての日本への期待と共に、アンジローのザビエルへの傾倒ぶりが知れるのであるが、2人の出会いはアンジローのみならず、ザビエルにとっても僥倖と言えるのである。

これ迄のインド、セイロン、香料諸島での布教に満足し得なかったと感じられるザビエルにとって、遙か遠く、自身、そして、本国ポルトガルにとっても、関心の外にあった「未知の国」、日本からはるばるやって来たアンジロー、その動機がどうあれ、この時点でのアンジローはアルヴァレスから知らされた未だ見ぬザビエルへの憧憬は大きかったわけで、その憧憬の大きさはザビエルにとっては何事にも代えられない喜びだったと言えるだろう。

この憧憬の大きさと追われる身の立場とがどう関係するのだろうか。アンジローにとって身を隠すには都合が良かったと言う事はなかったのだろうか。

このアンジローとの邂逅によって日本への布教を決意する事となり、それ迄の布教ともども、後の「聖フランシスコ」を形づくる基をなさせたとも言えるアンジローの出現はザビエルを喜ばせるのに充分だったわけである。

その点で、「ザビエルの日本布教」と言われるのだが、アンジローとの共同作業と言うのが本当のところだろう。

そして、ザビエルに随行したトーレス、フェルナンデス等と共に、アンジローとの出会いをお膳立てしたアルヴァレスを始めとする商人達の役割も忘れる事は出来ない。これらが複合して成った「事業」と言えるのである。後に見るように、岸野久氏はアルヴァレスこそ「最高の功労者」だと言うのである。

このように評価されるアルヴァレスであるのだが、それは何故なのだろう。

その点について、岸野氏は、

史料から明らかにできないが、およそ二つの理由が考えられる。最大の理由は彼が貿易商人であることから、日本がキリスト教化すれば、宣教師が駐在し、またキリスト教徒の日本人が増えることによって、自分達の貿易活動にとって有利になる、という商人としての打算があったことは間違いない。あと一つは異教徒を改宗させ、彼らに救いを与えようというキリスト教徒としての良心あるいは使命感もあったと思われる。単なる計算づくのことであったら、自らの身を危険にさらしてまでアンジローの脱出劇にかかわったり、自らの費用と犠牲を払って、アンジローをマラッカやゴアへ運んだりはしなかったと考えられるからである。

岸野久『ザビエルと日本—キリシタン開教期の研究—』吉川弘文館 平成10 32-3頁

そして、

アンジローをザビエルに引き合わせようとしたアルヴァレスはアンジローに対して事前の準備を行った。(中略) アルヴァレスはアジア各地で「パードレ・サント」(聖なるパードレ)として令名の高いザビエルの人となりや活動について語った。このことは、ザビエルと会いたいというアンジローの気持ちをますます高揚させたのである。(中略) アルヴァレスはキリスト教教理についてもアンジローに説明した。

同上書 33頁

とも記しているのである。

こうした指摘から、アルヴァレスが日本布教に積極的だったと言う事が分かると共に、彼自身がアンジローに教理を説明するだけの知識を持っていた事が知れるのである。

キリスト教の手ほどきを受けるにつれ、その教えの体現者とも言うべきザビエルに会って、かつて犯した罪の赦しを得て、心の平安を取り戻したいと願うようになった。このようにして、アルヴァレスはアンジローの初期教化に成功したのである。

同上書 33頁

と、アルヴァレスの成果を記しているのである。

それにしても商人達の「利」を求めるために未知の世界へ出かけて行くその行動力には感心させられるのであって、マルコ・ポーロ達も同じと言えるのである。そして、商人ではないがコロンブスにしても。そこに「人間」の持つ本質の一面を感じさせられるのである。

そこには、「時」、「人」の違いはあっても「利」を求める「人間」の在り方については、古今東西を越えて変りはないものなのだという事が知れるのである。

だからと言って、彼らは闇雲に行動するわけではなく、「可能性」を探るためには細心の注意を以て出来る限りの情報を得るために彼らなりに手を尽くし、準備をして、その結果を以て「決断」をしてそれを行動に移すのであって、「人事を尽くして天命を待つ」と言う言葉が生きて来るところである。

「人事を尽す」事が大事なのであって、この「人事を尽す」と言う事こそ、正に、「合理」そのものであり、「人間中心主義」であると言えるのである。

「人事を尽して」も何が起こるかは分からないが、「人事を尽して」可能性を得たならば、後は、「実行」あるのみで、ここで「決断」し「実行」する事で以て「コロンブスの卵」が生まれる事になるのである。

そして、「合理」は「人間中心主義」と一体化し、「人間」が「自ら」の「意志」以て「考え」て「行動」するわけであるのだが、そうは言うものの、「宇宙」の一存在である「人間」の「生きる」においては、この「合理」だけでは回らない側面もあるのである。

ポルトガル人を乗せ「鉄砲」をもたらした王直の船にしても、府内（大分）に来たポルトガルの商人にしても「漂着」と言う彼らにとっては予期せぬ「偶然」で以て日本の地に足を

踏む事になったわけである。

従って、「人事を尽して天命を待つ」と言う言葉は、「人間中心主義」、「合理精神（主義）」と結びつけながらも、それだけでは「事」は運ばないのだと言う「日本人」のものの考え方、その「精神構造」を良く表した言葉と言えるのではないだろうか。

この「人事を尽くして」こそ、正に、「合理」そのものと言えるのであるが、その点で、太平洋（大東亜）戦争の時の日本軍（政府）の在り方は如何だっただろうか。

それは、既に、明らかにされているところではある。

そして、これ迄の日本の国の在り方（歴史）の中では如何だっただろうか。

アルヴァレス達商人にとって、「日本」は「未知」の国であり、ポルトガル（人）にとっては、未だ、「発見」されていなかった土地だったわけで、そうした所へ出向くにはそれ相当の準備が必要だったのである。

その点で、彼ら商人達の行動は、正に、合理そのものだったと言えるのであるが、その反面、「鉄砲伝来」や、後のウィリアム・アダムス等に見られるように「漂着」と言った「偶然」も働いているのだった。そこに、「天命を待つ」と言う側面があったわけである。

そして、そうした彼ら「日本への道」の開拓者によって切り拓かれた「道」に従って、導かれたザビエルの「日本布教」だったわけである。そして、それは、その可否はともかくとして彼なりの「人事を尽して」の日本布教だったとも言えるのである。

彼ら商人達の行動は、「合理」を象徴するものだったのであるが、太平洋（大東亜）戦争時の日本の軍隊（国）の中で、「合理」は如何に働いたのだろうか。

そして、日本の歴史、特に、「近代化日本」を目指した明治維新とその後、今日に至る迄の日本国の在り方（歴史）の中では如何がなものであったのだろうか。

ザビエルの場合、「天命（神の意）を待つ」事においてはこれに過ぎるものはなかったわけだが、「人事を尽す」と言う点ではどうだったのだろうか。聊かの疑問を感じさせられる面が無きにしても非ずと言ったところではある。

II

〈ザビエル来航の背景〉

1498年、カリカット（コディコーデ）へ到達した事で「インドへの道」の開拓に貢献したガマ Vasco Dda Gama (1460頃-1524) は、その死の直前、1524年、「敬虔王」ジョアン Joao o Piedoso 3世 (1602-1557 在位1521-) からインド副王に任命されるのである。

ジョアン3世がガマに期待したのも、彼の第2回航海、そしてアルメイダ、アルブケルケの時代を再現することではなく、綱紀の肅正、

経費の節減、有給人員の活用、及びそれを通じての王室の歳入の増加であったと思われる。

生田滋『ヴァスコ・ダ・ガマ』（増田義郎企画・監修
『大航海者の世界』〈Ⅱ〉） 原書房 1992 194頁

と言う指摘に従えば、ガマが最初に渡来してから26年、副王としてのガマの着任の時には、既に、インド世界はかなり発展していたわけではあるが、一方、弛緩してもいたのであって、これの建て直し、改革にガマは指名されたと言うのであるが、彼は、滞在3ヶ月余で他界してしまうのである。

2代目総督のアルブケルケ Afonso de Alubquerque（1453-1515 在任1509-15）が1511年にマラッカを攻略し、そこを東南アジアの拠点とする事で以てポルトガルのゴアを中心とした「海の帝国」がより強固なものになるのだった。

だが、そこには、ザビエルをして嘆かせる以前、ジョアン3世をしてこれの是正を計らせると言う、26年にして綱紀の肅正が求められるような繁栄とは裏腹な退廃が蔓延していたのである。

そのため、1542年にゴアに到着したザビエルは、その外観の壮麗さ感嘆させられたのとは裏腹に、やがては、ゴアの人々の放縱な生活ぶりを非難する事になるというように、その「放縱」の萌芽とも言うべきものは、既に、ガマの生前に現われていたと言うわけである。

そうした中ではあったがポルトガルは中国（明）との交易を考え、「幸運王」マヌエル Manuel o Venturoso 1世（1469-1521 在位1495-）はそのための特使の任命を新任のゴア総督（副王）アルベルガリア Lopo Soares de Albergaria（生没年不詳）にまかせるのである。

そこで彼はその通商使節としてゴアの商館で働いていた旧知のピレス Tome Pires（1468頃-1540頃）を1517年に中国へ派遣するのだったが、ピレスは中国の宮廷に取り入るために、マラッカ王国の使節と偽った事が発覚したために広東で投獄され、そこで死ぬ事になるのである。

その彼が、同書の日本語訳の解説によると1511年以降、インド等で集めた材料を元にしてマラッカ滞在中に執筆したと推測されている『東方諸国記』で、

すべてのシナ人のいうことによると、ジャンボン {日本} 島はレキオ人の島々よりも大きく、国王はより強力で偉大である。それは商品にも自然の産物にも恵まれていない。国王は異教徒で、シナの国王の臣下である。かれらはシナと取引することはまれであるが、それは遠く離れていることと、かれらはジュンコを持たず、また海洋国民では

ないからである。

レキオ人は七、八日でジャンボンに赴き、上記の商品を携えて行く。そして黄金や銅と交換する。レキオ人のところから来るものは、みなレキオ人がジャンボンから携えて来るものである。レキオ人はジャンボンの人々と漁網やその他の商品で取引する。

ピレス 生田・池上・加藤・長岡訳『トメ・ピレス東方諸国記』岩波書店 1973 250-1頁

とジャンボン (チ〈ジ〉パング・日本) について海上 (蜜) 貿易の中心地の一つである、中国の広州にも来航していたレキオ (琉球) 人との関わりで以て記しているのである。

このようにザビエル来航の30年余り前に、既に、ポルトガルにも日本についての記述があったり、また、ポーロ Marco Polo (1254-1324) の時代以来知らされていたにも関わらず、当時は、未だに、ポルトガル (人) にとって、日本は活動の場としては固より、その視野にも入っておらず、関心もなかったと言う事が知れるのである。彼らにとっては、飽く迄も中国が関心の的だったわけである。

その点で日本については、

ポルトガル人トメ・ピレス Tome Pires は1514年頃シナの東方海上に「ジャンボン」Janpon島の存在を知った。(中略) 1517年にはレケオ Lequeo [琉球] 探検を行なったが、ジパング探検は一度も企てたことがない。1543 (または1542) 年ポルトガル人の日本発見も種子島への漂着がきっかけであった。このようにジパングがポルトガル人に大した関心の対象とならなかったのは、ジパングをシナ大陸から遠方に位置づけ、「西回り」の方が近いとする「東方見聞録」からくる先入観によるものであろう。

小峰和明他『キリシタン文化と日欧交流』勉誠出版 2009 20-21頁



写真5 トメ・ピレス『東方諸国記』

と言う指摘にみられる如くの認識だったと言う事である。

ポルトガルではジャンボン（チ〈ジ〉パング）を、ポーロによる位置づけに従っていた事から、中国から遥かに離れた所にあるのだと言う認識を持っていたため、未だ、日本はポルトガル（人）の関心の外にあったわけである。

チパング（訳注「日本」の中国音ジーベン・グオの誤り）は東の方、大陸から千五百マイルの公海中にある島である。しかも、まことに大きな島である。住民は色白で、優雅な偶像教徒である。ここは独立国で、彼ら自身の君主をいただいて、どこの君主からも掣肘を受けていない。

莫大な量の黄金があるが、この島では非常に豊かに産出するのである。それに大陸からは、商人さえもこの島へこないのので、黄金を国外に持ち出す者もない。いま話したように、大量の黄金のあるのもそのためである。

ポーロ 青木一夫訳『全訳 マルコ・ポーロ東方見聞録』校蔵書房 1993 217頁

と言う記述が災いしたわけである。

先行していたがためにポルトガルとしては認識を改める努力をしなかったし、する必要がなかったと言えるのだろう。

それに対して、後追いをする立場で、矮小化された世界観を持っていたコロンブスにとっては、「西航」を以てすればチ（ジ）パングに到達する事の可能性は大であり、チ（ジ）パングは「黄金に満ちた国」として、常に、渴望の地であり「西航」の目的だったのである。そして、それはコロンブスによって唆されていたスペインにとっても同じ事だったわけである。

従って、

コロンブス以降16世紀中途までスペイン国王は六回東洋へ探検を企てており、そのうち二回ジパングを目標にしている。

小峰和明企画『キリシタン文化と日欧交流』勉誠出版 2009 20頁

と言われるように、当時、日本についての関心はスペインの方がポルトガルより遥かに先行

していたと言えるのである。

だが、ポルトガル人も日本の近海に出没していた事は、「大分漂着」(天文11〈1542〉)、「種子島漂着」(天文12〈1543〉/11〈42〉)で知る事が出来るのだが、未だ、国家的事業とは言えず、全くの「私」のもので、それも漂着と言う形で以て日本の土を初めて踏む事になったわけである。

その点でポルトガルの関心はピレスの例でも言える如く、飽く迄も中国にあったのである。

従って、1541(天文11)年にも豊後(大分)に漂着したと言う事なのだが、このポルトガル人についての話は問題にされる事は少ないのだ。それに対して種子島のそれは、モッタ Antonio da Motta (生没年不祥)、フランシスコ・セイモト、アントニオ・ペショットとその名が知られている3人によってなされたと言う事。そして、この時伝えられた鉄砲がその後の日本の在り方に大きく作用する事になったために、「ポルトガル人による鉄砲伝来」として特筆されるのである。

尤も、その鉄砲もマカオ製と言われものであり、また、それをもたらした彼らもヨーロッパから直接来たわけではなく、中国人の海商(倭寇、海賊とも言われる)である、王直(?-嘉靖38〈1559〉)のジャンクに乗り組んでいた者達だったと言われているのである。

その点で、彼らポルトガル人が鉄砲をもたらしたと言うべきか、王直に指揮された中国船によってもたらされたと言うべきか、難しいところである。

この頃、既に、日本近海では中国、朝鮮を舞台にして明政府官許の「勘合貿易」、「私(蜜貿易)」的交易を取り混ぜた交易が盛んで、そうした(蜜)貿易船にザビエルが非難しているような、無頼とも言えるべきポルトガル人も乗り組んでいたとしても不思議ではないわけである。

そうしたポルトガル人が乗船していた中国人海商の中で日本に関わりがある者として王直の名が挙げられるのである。

そして、その「ポルトガル人の種子島漂着」については、

乗船者のなかの中国人の儒生、名は五峰という姓が不詳の人物が、砂上において筆談して乗船者が南蛮の商人らである事が判明したのであった。

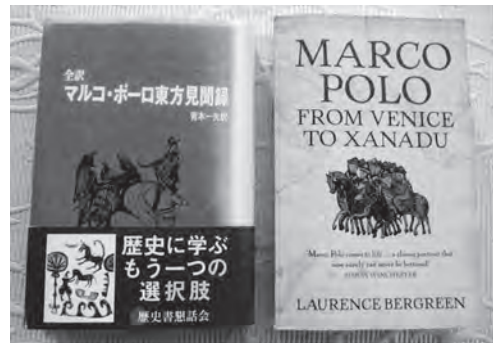


写真6 マルコ・ポーロ『東方見聞録』

松浦章『中国の海商と海賊』

山川出版社 2003 51頁

そして、

倭寇関係の重要な史料である『日本—鑑窮河和解』（にほんいっかんきゅうがわかい）にも、王直にかんして五峰とも称し、海外に進出し、のちに倭寇の頭目と知られるようになったことが記されている。

同上書 54頁

と言われているのである。

従って、今日、平戸では五峰王直（ごほうおうちよく）と言う人が多い。

中国（明〈1368-1644〉）政府では元の時代から沿岸部を荒し回っていた「倭寇」対策のために、建国当初から、「朝貢貿易」のみを許し、中国人が自由に海に出る事を禁じた「海禁」政策をとるのだった。

「朝貢貿易」は、朝貢と言う形をとるとは言うものの、中国（明）としては朝貢を上回る物を与える事を以て宗主国の権威を保持すると言う事行っていたのであるが、これは経済的活動と言えるものではなかった。

そのため相手の国によっては1年に1回、日本のように10年に1回と言った形で、「勘合符」を持った「朝貢船」が往来、自由な交易を禁じていたのである。

朝貢品として明皇帝に献上される物は貢物とされ、各国ごとに物品名が指定されていた。日本からは馬、鎧、腰刀、硫黄などであり、（中略）貢物はそれぞれの国の特産品が定められていたのである。朝貢品の献上に対する明皇帝からの返礼としての給賜、すなわち下賜品は主に高級な絹織物のほかに、他国から献上された朝貢品のなかから、その国で産しない物を下賜された。書籍も重要な下賜品であった。日本の場合、永楽年間には絹織物のほかに、金銀、古器、書画などが下賜されている。

同上書 36頁

と言うように、下賜品として下げ渡された物を各国は頂くと言う形だったわけである。

従って、ピレスも記している如く、「国王は異教徒で、シナ国王の臣下である」と言われるように、そこには対等な関係はなく、下げ渡された形での貿易だったのである。

ここに記されている「国王」とは足利將軍を指しているわけであるが、「かれらはシナと取引をすることはまれであるが」とも記されている如くに、日本の場合は10年に1度と言う事だったのである。正に、中華思想の現われと言えるのである。

従って、需要に応えられるものとはとても言い難いので、そのために非合法的な交易がなされても不思議ではないわけである。中国(明)は何を恐れて「海禁策」をとったのだろうか。

こうした状況の一方では、永楽帝(天曆1〈1328〉-洪武31〈98〉 在位建文4〈1368〉-)の時代に、来貢を促す目的で洪武4〈1371〉年鄭和(?-宣徳10〈1435〉)をアフリカにまで派遣しているのだった。この航海はヴァスコ・ダ・ガマの航海も比ではないのであって、中国ではそれだけの航海術を持っていた事になる。

こうした「海禁策」のために、中国周辺の海域では需要に応じて貿易を盛んに行おうとすれば、勢い蜜貿易と言う事になってしまうのだが、これに携わった者も元来は商いをする者達だったわけである。

「倭寇」とは言うものの実態は、大部分が中国人で、時に、ポルトガル人が混ざる場合もあったと言われている事から、鉄砲を伝えた者達も王直の船に乗っていたと言う事で「倭寇」の一味だったとも言えるのである。

そして、彼らは(蜜)貿易に従事してはいたが商いをする人間であって、時に武力を使う事もあったので「倭寇」と言われる事はあっても、全くの海賊と言われる者が何人いたと言うのだろうか。密貿易と言われるにしても穏便に取引が出来る事のほうが、双方にとって都合が良いと言う事は言う迄もない事である。

こうした密貿易従事者(倭寇、海賊)に対して浙江巡撫(長官)に任命されて、これを取り締まる立場にあった朱紘(しゅがん)がいたのだったが、その彼について、

密貿易や海寇の原因を、明国内の郷紳や権勢家の中に見ていた。
(中略) 中央や地方の大官や勢力家が密貿易家と馴れ合いで私服を肥やしていたのを痛烈に非難したのである。

田中健夫『倭寇 海の歴史』 講
談社学術文庫 2012 137頁

と言われるのである。

今日でも、中国の高官が逮捕されたり失脚すると言った報道がなされるのであるが、その多くが汚職によるものであり、こうした汚職も「倭寇」の時代に遡るそれに行き当たると言う事が出来るかもしれない。

「お礼」と「賄賂」の線引きは難しい。広大な領土のために中央集権の威令が地方にまで

行き届かない。中央政権に馴染まないとすればこれを倒して代わって覇権を握ると言った「革命」を繰り返してきた歴史的背景等々。複雑である。

そして、この朱紘にしても、後年、「アヘン戦争」に際して対英強硬策をとった林則徐（乾隆50〈1785〉—道光30〈1850〉）にしても共に解任されてしまうのである。政府において政策を貫くと言った強い意志と、担当者を擁護しようとする事の希薄さが、その任に当たった者に口惜しい思いをさせるのである。

その背景に何があったかは想像に難くない。そこには「利」を貪った者達の影が感じられるのである。

朱紘はこれを潔しとせず自殺したと言う。林則徐は「太平天国の乱」にも欽差大臣として臨むが病死するのだった。

安徽省出身の王直はそうした禁を犯して広東を中心として明の禁制品である硝石、硫黄、生糸、木綿等の密貿易に携わっていた者の一人で、「鉄砲伝来」の天文12/11（1543/42）年を機に来航していた王直は、1545（天文14）年頃には五島列島を日本での根拠地として日・中間の（蜜）貿易の仲介をして重きをなすに至っていたと言うのである。

その後、1548（天文17）年、朱紘によって密貿易の根拠地だった長江河口の雙嶼（そうしょ、リャンポー）が壊滅的打撃を受けた事で、明を追われる形で以て平戸へ移ってくると、領主松浦隆信（道可 享禄2〈1520〉—慶長4〈99〉）の保護を受けて、白狐山城の東麓に屋敷を与えられ、ここを活動の中心とするのである。そこには、雙嶼を追われた王直を隆信が招いた節があるとも言われているのである。

300隻の船と2,000人とも言われる一族・郎党を率いて密貿易と略奪を主としたと言われる活動を展開し、自らを「徽王」と称する程の勢威を示すのだった。

そのため、こうした彼らの活動に伴ない平戸には彼らを相手とする日本人商人達の屋敷が立ち並び、海上交易の根拠地、商港として繁栄をみるのである。

「新豊寺年代記」は「天文11年（1542）に、大唐船初めて薩摩、豊後に渡来、日本は唐物が充満し平戸に来て松浦郡は富み栄え、大勢の男女共を雇い入れた。そのため地方では人つかいが不自由となってしまった。人々は平戸に入って女は遊女になり、男は唐に渡って海賊となって死を顧みなくなった。（筆者意訳）」と伝えています。



写真7 海商（賊）王直像（平戸）

NPO法人 平戸観光ウエルカムガイド
『平戸の文化と自然』 平成22 39頁

と言われ、また、

王直の来航以降、平戸は「西の都」と呼ばれるほどの繁栄をみせ、その王直の手引きによってポルトガル商船が入港すると平戸は一気に西欧貿易港として日本中に注目されるようになっていきます。

同上書 39頁

とも言われているのである。

そして、王直は、周防を始めとする周辺7ヶ国を支配し、明や朝鮮に多大な関心を示し、その貿易で得た「利」を以て、「応仁の乱」によって京都にいられなくなった公家達の下向もあって、山口にも京風文化を根づかせようとした大内義隆（永正4〈1507〉-天文20〈51〉）とも交渉があったと言われているのである。



写真8 平戸

だが、義隆は重臣陶晴賢（大永4〈1521〉-天文24〈51〉）に攻められ、自殺に追いやられてしまうのである。

これに先立って、当初は、臣下である足利将軍家に下された勘合符ではあったが、紆余曲折を経て大内家でこれを持つ事となり、同家はこれに従って遣明使節を送ったところ、古い勘合符を持った細川家の使節が少し遅れて渡明、両家の使節が、日本の勘合船の入港地である寧波（ニンポー）で互いに争うと言う「寧波事件」を起こすのだった。

遣明船の派遣荷は細川氏と大内氏、堺の商人と博多の商人が絡んで対立をつづけた。

田中 前掲書 99頁

と言った経緯があったのである。

こうした事も絡んで、渡航の際は、大船団を組んで行ったとは言えるものの、10年に1回程度の貿易では大した利益を得られるとは思えないわけで、大内家としては京風文化を根づかせ

るための資金を得るためにも、王直に依存したとしても不思議ではないと言えるのである。

王直の名は広く知られてはいるのだが、当時、日本、中国、東南アジア一帯を股にかけて合法、非合法に関わりなく、また、ポルトガルを含めて国籍に関係なく武装した海商達が活発に活動していたのである。中国では倭寇と言われ海賊として扱われているのだが、彼らを一概に海賊と言えるのかどうか。

雙嶼（リャンポー 筆者注）は雙嶼港とも雙嶼山ともいわれ、浙江省の揚子江（長江）河口に近く、寧波の東方の海に浮かぶ島である。嘉靖5年（1526）に福建鄧獠がこの地を私貿易の基地とし、南海諸国の人を誘いこんで密貿易をはじめたという。ポルトガル人は正徳16年（1526）以来中国で正式に貿易する事を許されていなかったが、南海方面では中国商人や琉球商人と接触しながら実質的な中国貿易を継続していた。

田中 前掲書 128頁

と言われるのである。

そして、海商達は自分達が海賊であるのだと言う意識をどこまで持っていたかと言う事であり、彼らとて官からは密貿易と言われるものであっても平和裏に取引が出来る事のほうが望ましいのは当然で、官や取引相手の対応によって、時に応じて、その武力を行使する事もあったとしても可笑しくはないのである。

それが海賊行為と言われるものかもしれないが、彼らとて武力を用いての命のやり取りは望まないだろう。

そして、そうした事は日本の商人達とて例外ではなかったのである。

後になるが、博多の豪商末次家の出で長崎奉行となった末次平蔵（？－寛永7〈1630〉）の輩下の浜田弥兵衛（生没年不詳）が貿易の在り方の齟齬から台湾のオランダ長官と争い、人質を取って日本に連れて帰えると言う事件が起こるのだった。そして、それはオランダ側の不始末と言う事で決着するのだが、ここでも武力が使われているのである。

そして、王直自身は海禁策の強化に出た中国（明）政府の下で謀殺されてしまうのである。

そうした流れの中に明末の海商（海賊）の鄭父子（父 芝龍〈万曆32（1604）－永曆15（61）〉、子 成功〈寛永1（1624）－永曆16（62）〉）もいたと言えるのである。

海に富を求めざるを得ないのは、ポルトガルも福建も平戸も同じである。人口に比して平野があまりにも少ないのである。長い間、平戸

は中国密貿易商人の一大交易センターとなり、ポルトガル船、オランダ船、イギリス船などを吸い寄せたのである。

宮崎正勝『ザビエルの海 ポルトガルの「海の帝国」と日本』 原書房 2007 231頁

と言われる如く、今日の状況からは想像し難いが当時の平戸の繁栄ぶりについては指摘の如き状況だったわけである。

こうした「海賊」、「倭寇」、「密貿易者」、「海商」と言われる人々は国家、国、官の保護を受ける事なく、「自ら」の「意志」に従って、「自ら」の「判断」によって、「自ら」の責任で「行動する」と言う事は、正に、「合理の人」と言う事が出来ると言えるのである。

そして、そこには「自由」があるとも言えるのである。



写真9 ポルトガル船 (平戸)

尤も、それに伴って、「自己責任」と言う重いものも付随してあり、それは、時として、「自己」の「生命」をも賭ける事があると言う事でもある。

こうした経緯の中で、「鉄砲伝来」以後の6～7年、ザビエルの来日までの間に渡航して来ていたポルトガル人は、多くはないが何人かはいたのである。

1546年薩摩地方に来航したポルトガル船で判明しているのは、アルヴァロ・ヴァス、ドン・エルナンド (またはフェルナンド)、ジョルジェ・アルヴァレスらの三隻である。

岸野久『ザビエルと日本』—キリシタン開教期の研究—吉川弘文館 平成10 28頁

と言う指摘に見られるような先駆的な来航者がいたわけである。

そうした中で、1545年頃府内 (大分) へ来航し3年滞在したとされるジョルジェ・デ・ファリアと、それより少し遅れてやって来て (47/48) 5年間滞在したと伝えられているディオゴ・ヴァス・アラガンの名が知られており、共にポルトガル (商) 人のリーダー的存在だったと言われているのである。(同上書 24-5頁)

こうした彼らを通してポルトガルの事、世界の事、そして、キリスト教の事等を知った大

友義鎮（よししげ 宗麟 享禄3〈1530〉—天正15〈87〉）は、後にキリシタン大名として有名になるのだが、ディオゴ・ヴァスはその滞在の間に「利」を追う商人でありながら、彼の日常生活の中で示したキリスト教徒としての立ち居振る舞いが、10代で多感な時代の義鎮（宗麟）に対してキリスト教に多大な関心を持たせる事になったとされているのである。

アンジローとは早くから知り合いだったとみられるアルヴァロ・ヴァス、ドン・エルナンデス（フェルナンド）、そして、1552年、死を迎えようとしているザビエルを上川（サンシャン）島で世話をする事になったと言う、アンジローをマラッカへ連れて行ったジョルジェ・アルヴァレスもそうした来航者の一人だったわけである。

「利」を求めては命をも賭して地の果てにまで雄飛する商人。そうした者達がポーロを始めとしてトメ・ピレス（1468頃～1540頃）、メンデス・ピント（1509頃～83）等によってもたらされた情報に基づいて、航海に出て未知の国チ（ジ）パングを「発見」し、来航していたのである。

「鉄砲伝来」やザビエルの名に隠れてその名前が伝えられる事が余りないが、こうした者達が日本に来て活動した最初のヨーロッパ人、ポルトガル人であり、そうした彼らこそが、日本へ最初にキリスト教をもたらした者と言えるのである。

この商人ヴァスは朝晩の一定の時間、祈祷書またはコンタスを用い
てお祈りを捧げることを常としていた。キリスト教徒の彼にとってお祈りは日常的な行動の一部で、何ら特別のことではなかったが、日本では宗教家が行うようなことを一介の商人がおこなうことを目撃した宗麟は大いに心を動かされ、ヴァスの信仰とその対象に興味と関心を抱いたようだ。このように滞日中のポルトガル商人たちの日常的な信心ぶりを見て、彼らの信じている宗教に関心をもった者は、宗麟の他にもいたに違いない。

同上書 26-27頁

と言われるように。

彼らは商人ではあったが、敬虔なキリスト教徒としての生活心情を持ち、その彼らの日常における立ち居振る舞いの中から、キリスト教、そして、キリスト教徒としての有り様^{よう}を知り、理解していった者も少なからずおり、そうした事が後のザビエルによる布教の素地になったと言う事になるのである。

その点では、アルヴァレスに伴なわれてマラッカへ向かう途中のアンジローも同じ事が言えるのであって、アルヴァレスの人となり^{よう}がアンジローをしてキリスト教へと導いた事にな

るのである。それはマラッカからゴアへの途次ザビエルと共にするのではなくアルヴァレスに同行した事で分かるのである。

その点で、信仰と言うものは、身近にいる者からの感化が大きいと言えるのである。そうした一方では、

ポルトガル商人たちが魔除けとした十字架を見て、日本人もまねて十字架を立てたことを伝えており、異教の神の力を借りて土地の魔を払おうとする、一般民衆の現世利益的姿勢が伺える。このように実際的な効験を求めて、現世利益的動機から外国の宗教であるキリスト教に関心を持った者も少なくなかったはずである。

同上書 28頁

と言う指摘がなされるのである。

入信に際して、それを勧める者も、それを受け入れようとする者も、そこに現世利益、これを信仰すれば病気にならないだとか、病気になっても軽くてすむ等々といった事を話題にする事が多いのである。

それはキリスト教においても例外ではなく、自らの生活とキリスト教徒の在り様とを現世利益的に結びつける事で以て自然のうちに、また、自分に都合の良いようにキリスト教を理解し、これを受容していった日本人。尤も、後に見るアルメイダのように医学と信仰を結びつけて、正に、現世利益と結びつけた活動をした者もいたのである。

こうした受容の仕方こそが現代にも通ずる多くの日本人の宗教・信仰に対する感覚と言えるのであって、それは昔も今も変わらないのではなからうか。

先祖を供養するための仏壇があり、また、併せて、神棚を祀る家もあり、新年を神道の雰囲気迎えたいと神社への初詣、バレンタイン・デーには俄かクリスチャンに、お彼岸・お盆には仏教徒として、家によっては僧侶をよび先祖の供養をし、クリスマスにはクリスマス・ツリーを飾り、ケーキを食べてクリスチャンとして一年を終えるのである。

この間、行楽の途次、神社・仏閣を訪れ賽銭をあげ、教会でも大した抵抗もなく献金もし、万物に神が宿るとして、人によると太陽に手を合わせ、四方拝をして心の平安を得るのである。

その点では日本人の宗教観・信仰心については「いい加減」と言われるのであって、これは特定の信仰の持ち主にとっては理解し難いかも知れない。

「いい加減」と記したが、「適当」と言う言葉も同様で、それぞれには二面(様)の意味があるのであって、日本人はそれをその時々状況に従って使い分けて来っていたのである。

二面に意味があるが、「二面（元）」に立ちながらも「一元」を求めると言ったものと違い、二元（面）、時には、多元（面）をそのまま認めようとする心性、精神構造、信仰心とも言えるものを日本人は持っていると言えるのである。

そして、好奇心が旺盛で新しい物好きの側面を持つ日本人は、神話、伝説に繋がる建国の歴史に登場する神々に対する思いを持ちながら、そうした中に新しいもの好きの日本人は中国大陸、朝鮮半島から入って来た儒教、仏教等を一時の混乱はあったものの、その「生きる」の中へ取りこみ、そして、消化して、それらが緋い交ぜになったものが日本人の精神構造を形づくって来たと言えるのである。

こうした日本的宗教・信仰に対する姿勢、また、「いい加減」で「適当」な「生きる」の在り方の日常生活を送っている日本人。

これは、異質なものを排除し自らが守っている「信条」を純化させて来た「信仰」の持ち主から見れば、理解し難く、彼らはこうしたものを邪教として嫌悪すべきものと排除して来たのである。

純化された信仰であればあるほど他を受け入れられないと言う頑なさが生まれるわけであり、それはヨーロッパの歴史上大きな出来事である「十字軍」、キリスト教同士でありながらその純粹さを求める立場から行われた「アルビジョア十字軍」と言った出来事をもたらしたのである。

今日、中東世界に主として見られるキリスト教とイスラム教の違いが根にあるとも感じられる紛争、それは、かつての旧ユーゴスラビアでの紛争にも見られ、今日においても、未だに緊張状態が続いていると言う。そして、「イラン・イラク戦争」は宗派の対立がその根底にあったと言うのである。

こうした「いい加減」、「適当」と言った精神構造の中で生きてきた日本人が、ザビエルに始まるキリスト教に、何故か故に感化され、それは当時の人口にも関わらず、現在のクリスティアンの数とそれほど変わらないとされる信仰者を得たと言うのである。

こうした日本人が「物欲」、「利」を追求しながらもその生活心情（信仰）にキリスト教（カトリック）を持つポルトガル商人の日常での立ち居振る舞いを見て、珍奇なものに関心を示す者達がこれを真似、「自然の形で抵抗なく」それを受け入れ、見た目にはキリスト教徒らしく見えなくもない姿を呈する者が出て来たと言うのである。

Ⅲ

〈アンジローとの出会い〉

このようにポルトガル商人の日常生活を通して自然のうちに日本人に伝えられる事になったキリスト教、その中から、後に日本最初のキリスト教徒として歴史にその名が残される事

になるアンジロー (安次郎, 弥次郎) が生まれて来る事になるのである。

助けを求めたアンジローとヴァスとが旧知の間柄であったことである。このことはアンジローが偶然に行きあたりばつたりヴァスの所に行ったのではないことを示している。言いかえれば、すでに第1～2項で見たように、滞在中のポルトガル人の立ち居振る舞いや信心が日本人に感化を与えたように、アンジローもヴァスの日頃の行動や信心ぶりを通して、彼であれば自らの窮地を救ってくれるもの、彼の人間性に期待して、頼って行ったものと考えられる。

同上書 29頁

と、アンジローはただ闇雲にヴァスの所に行ったわけではなく、彼が武士だとも言われてはいるのだが、

日本と中国・朝鮮間の貿易品目を的確に伝えていること、ザビエルとはじめて会ったとき、意思の疎通が可能なほどポルトガル語が出来たこと、日本脱出前にポルトガル人の知己がいたこと、マラッカでのザビエルとの対話ぶり、さらに来日後の宣教団での役割・位置などから総合的に判断して、アンジローは貿易商人である、と私は考える。

岸野久『ザビエルの同伴者 アンジロー 戦国時代の国際人』吉川弘文館 2001 16-17頁

と言うように、商人として、アンジローは、既に、ポルトガル人との接触があったのだと言う事が言われるのである。

そうした中で、アルヴァロ・ヴァスと知己を得ていた事が、日本にいられなくなった際に役立ち、間違えてとは言えアルヴァレスとの出会いを得、これを契機に彼を大きく飛躍させ、歴史上の人物にしたのだと言えるのである。

その点で、

ザビエル日本開教の最大の功労者はジョルジェ・アルヴァレスである。

岸野 前掲書 32頁

と言われる如く、偶然ではあるがアルヴァレスとアンジローとの出会い、結びつきは、単に、逃亡者とその逃亡を手引きをしてくれる者としてではなく、アルヴァレスを通してアンジローがキリスト教への関心の眼を開かされたと言う事で以て特筆されるわけである。

その点で、アルヴァレスにしても大分のディオゴ・ヴァスにしても同じ様に「利」を求め商人でありながらも、周囲の人間に感化を与える事の出来る「信仰者」だったのである。この点が重要で、手本になる人間の存在こそが信仰に入るための鍵となるのである。

当時来日していたポルトガル商人間には、情報交換や共通の目標のために、互いに協力し合うようなネットワークが存在していたと思われる。

同上書 30頁

と指摘されるネットワークを通して、アンジローをドン・エルナンド（フェルナンド）の船に託そうとしたアルヴァロ・ヴァスだったが、誤ってジョルジェ・アルヴァレスの船に乗せてしまったのである。

だが、むしろ、これがアンジローにとってもザビエルにとっても、ひいてはイエズス会にとっても幸いしたと言えるのである。

アンジロー、アルヴァレス、ザビエルにとっての「偶然」は歴史における「必然」でもあったわけである。

この「偶然」、「必然」が日本にキリスト教（カトリック）をもたらし、その後の日本の方向づけをする事になるのである。

アンジローとザビエルの出会いを準備したのはアルヴァレスである。この出会いがザビエルの日本布教決意につながるのも、その重大さはいくら強調しても強調しすぎることはない。

同上書 32頁

と言われるところのものである。

そして、アルヴァレスがアンジローにザビエルと会う事を勧めた意図として言われているのが、

アルヴァレスとザビエルは「大の親友」であり、アルヴァレスはすでに異教徒改宗に情熱を燃やし、常に有望な布教を求めてやまないが

ビエルのことを熟知していた。このようなアルヴァレスは1546年に日本に滞在し、日本人を理性的国民とみて、日本人への布教が有望であると判断し、このことをザビエルに伝え、日本布教を勧めたいと思っていたことだろう。

同上書 32頁

と言う事だった。

はるばるポルトガルからアジア、それも、あまり関心を持たれていなかった極東の島国、日本への来航。これ迄の商取引を通して多くの人々、民族と接してきたであろう中で、日本人こそ理性的な「国民性」を持った民族であると理解し、アンジローの中にもそれを認めたために敢えて危険を冒してでも、その脱出行に手を貸したのだと言えるのではないか。

だが、そうしたアルヴァレスも「利」を求める商人だったのである。

13世紀のポーロ父子にしても「利」を求める商人達は、それを求めて地の果てにまで旅をするのである。そのためには、目的地に如何に「安全」に、かつ、「早く」到達する事が出来るかと言う事が至上命題となるのであって、そのためには、常に、「合理」を働かせる事が必要になってくるわけである。

そして、アルヴァレスによる日本布教の勧めにしても、布教が行われる事によって、そこに「利」を求める事が出来るかもしれないと言う「合理」、計算が働いていたと言うのである。

この点について、

アルヴァレスは何故ザビエルに日本開教を慫慂しようとしたのだろうか。コレは史料からは明らかにできないが、およそ二つの理由が考えられる。最大の理由は、彼が貿易商人であることから、日本がキリスト教化すれば、宣教師が駐在し、またキリスト教徒の日本人が増えることによって、自分たちの貿易活動にとって有利になる、という商人としての打算があったことは間違いない。

同上書 32頁

と言った、彼の商人としての「利」を求める「打算」がそうさせたと言う指摘がなされるのである。

「歴史」は資(史)料に基づく学問であるのだが、全てにおいてそれが適うわけではないのであって、人間の心性に関してはこれを裏付ける事は難しい。

そうした指摘の一方では、

あと一つは、異教徒を改宗させ、彼らに救いを与えようというキリスト教徒としての良心あるいは使命観もあったと思われる。

単なる計算づくのことであったら、自らの身を危険にさらしてまでアンジローの脱出劇にかかわったり、自らの費用と犠牲を払って、アンジローをマラッカやゴアへ運んだりしなかったと考えるからである。

同上書 32-33頁

とも言われるのである。

キリスト教徒としての「良心」と「使命観」がアルヴァレスをしてアンジローとの関わりを持たせる事となり、それと共に、マラッカにおいて師事するようになったザビエルの申し出を断って迄も、アンジローにアルヴァレスとのゴア行きをさせる程の「絆」が二人の間には培われるようになっていたと言えるのである。

従って、アルヴァレスこそが「交易」と「布教」と言う、ポルトガルの海外進出の在り方を体現した人物だったと言えるだろう。そして、アンジローの「生きる」にとって多大な示唆を与えた彼には大変魅力的な人物だったのだと言えるのである。

このアルヴァレスと共に来日したとされる者として『東洋遍歴記』の著者ピント Fernao Mendes Pint (1509頃-1583) も言われているのである。

「大航海時代」を促したコロンブスにしても、「物欲」を充足させるための「利」を前面に出し、それに基づいた「合理」を尽くしての「西航」が言われるのであるが、そこにもキリスト教を伝えると言う「使命」の側面があった事を忘れるわけにはいかないのである。

両陛下は、カトリック教徒として、またこの聖なる教えを崇信し、これを広めたもう君主として、さらにまたマホメットの教えや、すべての偶像崇拜や、邪教の敵として、この私、クリストバル・コロンを、インディアのさきへのべた地方へ派せられ、彼の地の君主や、人民や、さらにその土地、その模様や、その他すべてを見聞して、彼らを聖なる教えに帰依させることが出来るような方途を探求するように命ぜられ、そのためには、従来から通ってきた東の陸地からではなく、今日まで人のおったことがあるかどうか確かではない西方から赴くようにと仰せ付けられました。

林屋永吉訳『コロンブス航海誌』

岩波文庫 1979 9-10頁

とコロンブス自身が言うように、「富」を求めての「西航」が強調される傾向が強いその航海だったのだが、上記の一文を見れば、やはり、キリスト教の布教が、スペインの両王から命ぜられた彼の「使命」でもあったと言う事が知れるのである。

そして、アンジローは、

1547年12月初旬のある日(多分7日)、ザビエルはアンジローと「丘の聖母教会」で出会った。

岸野 前掲書 68頁

と言われるように、今は崩れ落ちてはいるがマラッカの丘の上にある教会でザビエルと会うのである。

ゴアに始まり、南インド、セイロン、香料諸島での布教、それは、大いなる使命観と期待感を以てのアジアでの5年余りの布教活動だったのだが、ゴア在住のポルトガル人への失望感から始まって、ザビエルにとって、必ずしも満足のいくものではなかったのではないかと『書簡抄』から感じさせられるものだったのである。

従って、そうした中で、アンジローが自分に会いたがっていると言う報は、ザビエルをしてこれ迄にない喜びと満足感を与え、期待の出来るものだったと言える。

それと共に、彼の一ヶ所の滞在期間の長さから、彼は一ヶ所に長く留まる事の出来ない性格の持ち主だったとも受けとられかねない側面を感じさせられるのである。日本滞在も。

ゴアにしても、マラッカにしても、アジアにおけるポルトガルの重要拠点であり、そこに足を留めてじっくりと仕事をする事があつたらうに、彼の行動は常に「新天地」を求めての移動の繰り返しだったとも言えるものである。最後は、未だ活動が充分確立されていない日本から離れて中国は赴こうとしたと言ったように。

宣教師の中には一ヶ所に滞在しそこに骨を埋めたり、中にはそこで「殉教」する者もいた中で、彼の一ヶ所に滞在する時間はあまりにも短い。「一所懸命」が感じられない側面も否定できないのである。「石の上にも3年」はないのである。

日本でも2年程で、この間の布教活動で授洗させた者を多いとするか少ないとするかは難いのであるが、その後、彼を受け継いだ者達のそれと比べると、必ずしも多いとは言えないのではないかと言う点で、これをどう考えたら良いのだろう。

それは、彼の性格によるものなのか、教皇使節、インド管区長、初代日本布教長と言う立場によってのものなのか。

はたまた、自分の寿命の長さを感じ、やるべき事の多さを考えての事か。兎に角、種を蒔いておいて、育てるのはそれに続く人に任せると言う感じの布教だったと言えるのである。

ザビエルは大いに期待していたモルッカ諸島が理想の布教地とはほど遠い事を自らの眼で確認し、これを成果としてインドへ戻ろうとした。そろそろインド行きの船の準備が始まろうとしてきた時、アンジローが天から降って湧いたように出現したのである。しかもアンジローはポルトガル語を話し、自ら進んでザビエルと彼の教えを求めて、幾多の困難を乗り越えてやって来た。ザビエルは今までアジアに5年余り滞在了が、この様に自発的に自分を求めて来る人間に初めて出会ったのである。常に理想の布教地を求め続けて来たザビエルにとってアンジローは大きな光となったと言えるのである。

同上書 71-72頁

と言う指摘にあるように、ザビエルにとって未だ見ぬ日本は「理想の布教地」と感じられるものがあつたのだろうか。そして、それはどう言う事を指しての事なのだろう。

アンジローと出会った当時、ザビエルは「日本人は新しく発見された諸国の中で、最も高級な国民である」と大きな期待を示しており、「書簡抄」に従って言えば、「理想の布教地」としての期待をよせていたのである。だが、大きな期待をもちながら来日してみても、その「理想」は裏切られるのである。その行動からはそう感じさせられるのである。

1548年3月にゴアへ渡ったアンジローは「聖パウロ学院」で、後にザビエルと共に来日し、その後を継いで2代目日本布教長となるスペイン人トーレスCosme de Torres (1497-1570)、院長ランチロット、舎監ミセル・パウロの元でポルトガル語や教理を学ぶのだった。

そして、1548年5月、召使である他の2人の日本人のジョアネとアントニオと共に司教ジョアン・デ・アルブケルケから受洗、ザビエルと同じパウロ・デ・サンタフェと言う洗礼(教)名を受けるのである。

アンジローの1年余りの勉強の後の、1549年4月、ザビエルの一行は、ゴアを発ち5月にはマラッカに到着。「インドへの道」の開拓者であるヴァスコ・ガマの5子で当地の長官をしていたシルヴァ・ダ・ガマの厚遇を受けて日本渡航の準備をするのである。

参考文献

- (1) アルベ神父, 井上郁二訳『聖フランシスコ・ザビエル書簡抄』(上・中・下) 岩波文庫 2009.
- (2) 岸野久『ザビエルの同伴者アンジロー 戦国時代の国際人』吉川弘文館 2001.
- (3) 岸野久『ザビエルと日本—キリシタン開教期の研究』吉川弘文館 平成10.
- (4) 生田滋『ヴァスコ・ダ・ガマ』(増田四郎監修・企画『大航海者の世界』)〈Ⅱ〉原書房 1992.
- (5) ピレス, 生田・池上・加藤・長岡訳『トメ・ピレス東方諸国記』岩波書店 1973.
- (6) 小池和明『キリシタン文化と日欧交流』勉誠書房2009.

- (7) ポーロ, 青木一夫訳『全訳 マルコ・ポーロ東方見聞録』校倉書房.
- (8) 松浦章『中国の海将と海賊』山川出版 2003.
- (9) 田中健『倭寇 海の歴史』2012.
- (10) 宮崎正勝『ザビエルの海 ポルトガルの「海の帝国と日本」』原書房2007.

Research Notes

**The Modernization of Japan:
The Connections with Europe and America
from the Viewpoint of World History**

MATSUBARA, Masamichi

In this essay I tried to research about the connection between Francisco Zavier and Anjiro in Malacca.

Before they met in Malacca, in Japan there were the situation for Anjiro to abroad. A few Portugese merchants came to Kyusyu already, so, Anjiro met some of them in Japan.

Therefore, when the case murder happened on him, he asked them to help to escape to overseas. So, he was helped to abroad to Malacca by George Alvares. After then, Alvares took care of Anjiro to be the first Japanese christian.

